

昭和4年に国鉄が、昭和6年には湘南電気鉄道が海の家を開業し、より多くの海水浴客が逗子海岸を訪れるようになりました

昭和初期

湘南道路が開通する前。海岸西浜にはキャンプ場があり、バンガローに宿泊できました

昭和36年頃

湘南道路が開通。砂浜が狭くなり、訪れる海水浴客も徐々に減っていききました。通行料は普通車で50円でした

昭和39年頃

最近の海水浴シーズンの様子。平成29年の海水浴期間中は、294,300人が訪れました

平成29年

時代とともに変化する逗子海岸

逗子市の前身である田越村は、明治22年、逗子・沼間・桜山・池子・山野根・久木・小坪の7つの村が合併してできました。大正2年、町制を施行し逗子町になりましたが、第二次世界大戦中、横須賀市に強制合併されます。終戦後、分離独立して再び逗子町となり、昭和29年4月15日、人口約37,800人、県内で9番目の市として逗子市が誕生しました。

田越村の頃の逗子海岸は、松原が続く小坪の漁師の漁場でした。明治22年に国鉄(現JR)横須賀線が開通、同27年に葉山御用邸が完成し、逗子は避暑地・別荘地として発展していきます。さらに同33年、徳富蘆花の「不如帰」がベストセラーになり、逗子の名は全国に広まりました。それまで高養寺は波切不動と呼ばれていましたが、

「不如帰」のヒロイン片岡浪子にあやかり、浪子不動と呼ばれるようになりました。

海水浴が日本に持ち込まれたのは明治初期ですが、当時の海水浴は庶民の娯楽ではなく、上流階級の健康法でした。大正に入ると徐々に庶民的なものになり、昭和には鉄道各社が海の家を整備したり、割り引き制度などを取り入れたりして積極的に海水浴客を誘致したため、今のような気楽にできる娯楽となり、毎年大勢の人が海水浴に訪れるようになりました。

昭和39年には東京オリンピックに合わせ、湘南道路(現国道134号線)の逗子・藤沢間が開通し、現在の逗子海岸となりました。



昭和40年の海上パージュメントの様子です。広い砂浜は全て人で埋め尽くされています。後ろに見える大きな建物は、昭和38年に開業した国鉄逗子会館で、ホテル兼更衣所として使われていました

かつて松原が続き、人けがなかった逗子海岸。明治になり、交通網の発展や小説「不如帰」で別荘地として有名に。その後、海水浴の大衆娯楽化により、大勢の人が訪れるようになりました。



浪子不動



ここから海を見下ろすと海面に立つ「不如帰の碑」が見えます。徳富蘆花の兄、蘇峰の筆で、昭和8年、町制20周年を記念して建てられました。



田越川河口付近



昭和20年代後半の田越川河口付近です。昔から遠浅で穏やかな海では、家族連れや釣り人が楽しみ、キスやアジ、サバが釣れたそうです。

逗子警察署から写真提供を受けました

誌面に掲載した写真のうち4点は、逗子警察署が撮影・保管していたものです。

第2弾として、12月27日(水)逗子フォトに公開します。



旧庁舎。写真の右側が警察署でした